

# T. S. Eliot の ‘inner voice’ 批判を巡って

——‘Enthusiasm’ 回避の系譜から——

村 田 俊 一

## I

J. M. Murry は1923年の “On Fear; And on Romanticism” の中で次のように言っている。

英国の作家、聖職者、政治家は彼らの先祖から規範となるどんなものをも受け継いでいない。彼らが受け継いだのは、頼りの綱として、心内の声 (the inner voice) に頼らなければならないという感覚だけであった。もし彼らが自己認識の追及に於いて、知性のみでなく全人間的なもので十分に深く採掘するなら、普遍的な自己に出会うであろう。つまり、英国の伝統というものは、宗教的な立場から言うなら、真に自分自身に問い質す人は、究極的に神の声 (the voice of God) を聞き、文芸批評の立場から言うなら、作家は個性を通して没個性に達するものである<sup>1</sup>。

この発言に対して、同年 T. S. Eliot は、“The Function of Criticism” の中で、この一節の一部を引用して<sup>2</sup>、ここに見られる「心内の声」には、M. Arnold の「めいめい好きなように振る舞う」(doing as one likes) という意味合いが感じられ、「心内の声に従う…人たちにとっては、批評について私が述べることには少しも価値を見出ださず、」そういう人たちは「批評の研究をする為に共通の原理 (common principles) を見出だそうという試みに興味を持たないであろう」と言って批判している<sup>3</sup>。Eliot にとって大切なものは「共通の原理」「秩序の問題」(a problem of order)<sup>4</sup>、つまり「外部の権威」

<sup>1</sup> *The Adelphi* (Vol. 1. No. 4, September, 1923), p. 275.

<sup>2</sup> T. S. Eliot, *Selected Essays* (London: Faber & Faber, Ltd., 1966), p. 27.

<sup>3</sup> *Ibid.*, p. 29.

<sup>4</sup> *Ibid.*, p. 23.

(Outside Authority)<sup>1</sup> なのである。こうした「外部の権威」と「心内の声」は、同書に於いてそれぞれ ‘classicism’ と ‘romanticism’ との係わり合いで論じられているが、この「心内の声」は、1928年の Eliot の “The Humanism of Irving Babbitt” 論に見られる「内的抑制」(the ‘inner check’) 批判への萌芽となるものである。つまり、Babbitt は、個人への外的規制力を排除して、個人の中に「内的抑制」を認め、それに基づいた秩序を考えているが、Eliot はこのような Babbitt 氏の考え方は、「正統的宗教の『外的』拘束 (‘outer’ restraints) が弱まると、それは個人の自己に対する内的拘束によって補足され得る」もので、言うならば、「プロテスタント綱領の項目 (Protestant planks) からカトリック綱領 (a Catholic platform) を作り上げようとしているものである」と言っている<sup>2</sup>。ここで言う「プロテスタント綱領の項目」とは「内的抑制」を意味し、「カトリック綱領」とは「外部の権威」を意味しているものと考えられる。このことは、Murry 氏がカトリック教を定義して「個人の外にあって疑いを入れない精神的権威の原理」(the principle of unquestioned spiritual authority outside the individual) と言ったことに Eliot が全く賛同している<sup>3</sup>ことから押し測られる。この Murry 氏の定義をプロテスタントに当てはめて考えるなら、プロテスタントは「個人の内にあって疑いを入れない精神的原理」と言い換えられないだろうか。Eliot にとって、「あらゆる個人が理想的に、有効に自己を抑制し、統御したとしても、その総体は決して統合 (a whole) を作り上げない」<sup>4</sup>のである。Eliot が Babbitt の教皇至上権論 (ultramontane) の考え方を認めながら<sup>5</sup>、彼のヒューマンズムは「19世紀の極めて自由主義的なプロテスタント神学と驚くほどよく似ているものなの

<sup>1</sup> *Ibid.*, p. 29.

<sup>2</sup> *Ibid.*, pp. 475–6

<sup>3</sup> *Ibid.*, p. 26.

<sup>4</sup> *Ibid.*, p. 476.

<sup>5</sup> *Ibid.*, p. 480.

である』と言ったのは、以上のような、カトリック、プロテスタントに対する Eliot の考え方があったからなのであろう。このように、Eliot の Babbitt 批判は、「外的拘束」—「外部の権威」—を排除して、「内的抑制」を中心にしたヒューマニズム —個人主義— を作り上げようとしたことに対してなされたものである。Eliot は言っている。「ヒューマニズムの見地は宗教的見地を補助し、またこれに依存<sup>1</sup>するものであり、「ヒューマニズムがいやしくも存在するためには、何か他の態度に依存しなければならない。なぜなら、それは本来批判的なもの —寄生的なものと言いさえするもの— であるから<sup>2</sup>と。こうした人間中心主義的なものと「外部の権威」との相互関係は、更に彼の *After Strange Gods* の中で次のように述べられている。「道徳が伝統や正統の問題でなくなる時、即ち、連綿と続いた教会の考えや指導の下で作り上げられ、修正され、高められた共同体の習慣が問題にされなくなり、一方に於て、個々人が自分自身を高揚して行く時、その時、個性 (personality) は驚くべき重要性を持つものとなる<sup>3</sup>と。この考えは、彼の “Tradition and Individual Talent” で、伝統論と絡み合いながら、個性的なものを回避しようとする没個性論 (depersonalization) に既に見られるものである。Eliot が *After Strange Gods* の中で、D. H. Lawrence を批判したのは、彼が「外部の権威」、つまり「伝統とか慣習の規制力」(restriction of tradition or institution) に全然拘束されず「内なる光」(Inner Light) だけを導き手としたからである。Eliot にとって、この「内なる光」は「さまよえる人類に与えられた最も当にならない、間違いを起こさせやすい導き手」なのである<sup>4</sup>。Eliot がここで批判している

<sup>1</sup> *Ibid.*, p. 475.

<sup>2</sup> *Ibid.*, p. 480.

<sup>3</sup> *Ibid.*, p. 473.

<sup>4</sup> T. S. Eliot, *After Strange Gods* (London: Faber & Faber, Ltd., 1934), p. 54.

<sup>5</sup> Cf. “The point is that Lawrence started life wholly free from any restriction of tradition or institution, that he had no guidance except the Inner Light, the most untrustworthy and deceitful guide that ever offered itself to wandering humanity. It was peculiarly so for Lawrence, who does not appear to have been gifted with the faculty of self-criticism, except in flashes, even to the extent of ordinary wordly shrewdness.

「内なる光」とは、クエーカー教徒(Quaker)の言う‘Inward Light’<sup>1</sup>と質を同じにするもので、「心内の声」が高じて、「胸をときめかすナーシサス」になったり、「神の声を聞いて」しまう<sup>2</sup>ような「熱狂」(enthusiasm)のことである。Eliotにとって、「理性を奪ってしまうような興奮に他愛なく身を委ねるような連中は、単なる感情の道具となって、人間性をなくしてしまうにすぎない」<sup>3</sup>のである。

このような Eliot の「熱狂」回避は、イギリス17世紀以降に見られる「熱狂」に対する諷刺の系譜の埒外にあるものではない。Basil Willey が「確実な根拠を心の内なる一つに訴えたいという点において Milton はまさに17世紀の主流に立っていたことを示しているが、実はこの時代の思想は各方向において、まさにこの方法によって、伝統の権威から自らを開放することを求めていたのであった」<sup>4</sup>といている。Eliot が人間としての Milton を嫌悪したのも、この辺に原因の一つがあったのかもしれない。拙論では、今、垣間見てきた Eliot の「心内の声」批判を形造っている精神的基盤が、17世紀以降に見られる宗教上の「熱狂」回避のどのような精神的風土の上に見られるかということ、充分とは行かないまでも、彼の宗教、哲学との係わりの上で考察して行きたい。

---

Of divine illumination, it may be said that probably every man knows when he has it, but that any man is likely to think that he has it when he has it not; and even when he has had it, the daily man that he is may draw the wrong conclusions from the enlightenment which the momentary man has received: no one, in short, can be the sole judge of whence his inspiration comes," (*Ibid.*, p. 59.)

<sup>1</sup> "The Quaker doctrines were all short and simple. They believed in the Inward Light that shines in every man's soul, in the voice the word of God within them, and the inward communion with God which Christian men enjoy if they are really Christian," (C. E. Whiting, *Studies in English Puritanism from the Restoration to the Revolution 1660-1688* [Frank Cass & Co. Ltd., 1968], P. 133)

<sup>2</sup> T. S. Eliot, *Selected Essays*, pp. 27-8.

<sup>3</sup> *After Strange Gods*, p. 55.

<sup>4</sup> Basil Willey, *The Seventeenth Century Background* (London and Henley: Routledge & Kegan Paul, 1972), p. 72.

## II

Swift は “The Mechanical Operation of the Spirit” の中で「熱狂」(enthusiasm) の意味を「靈魂とその力とを物質以上に高めること」<sup>1</sup>として、天来の靈感を尊重する狂信的新教徒の流派を「風神派」(Aeolist) と揶揄した。そして、その元祖を Jack の徒 —つまり Jack は John の通称で John Clavin で、プロテスタントの過激路線— の中に見出だしている。特に、*A Tale of a Tub* の第V章の中で、Swift は、この「風神派」によって象徴されるピュリタン、非国教徒を、すべてひっくるめて、Jack 名の下で、次のような綽名で諷刺している。「禿頭のジャック」(Calvin の姓は、ラテン語の『禿頭』を意味する ‘calvus’ から由来している)、「提燈持ちのジャック」(『内なる光』を主張するクェーカーやアナバプティストの新教徒を指す)、「和蘭ジャック」(アナバプティスト派の John of Leyden)、「仏蘭西ヒュー (Hugh)」(ユークノー教徒)、「乞食のトム」(フランスではプロテスタントは最初乞食と呼ばれていた)、「それから「北のノックのジャック (Knocking Jack)」(スコットランドの宗教改革者 John Knox) と<sup>2</sup>。そして、この「風神派」の教義の根本は、万物の起源は風だということである。彼は言っている。「人間の forma informans (能動形相) を spiritus, animus, afflatus, anima (聖霊, 精神, 靈感, 霊気) のいずれをもって呼ぶにせよ、結局これらは風の別名に外ならぬ。風こそはあらゆる混成物の主要素、すべては腐敗とともに風に還える」<sup>3</sup>と。つまり、風は霊にも靈感にも通じるのである。この靈感を弟子たちに伝える様子を Swift は、彼特有のスカトロジカルな趣向によって一層醜悪化している。そして、第IX章 “A

<sup>1</sup> Jonathan Swift, *A Tale of a Tub and other Satires* (London: J. M. Dent & Sons, Ltd., 1975), p. 174.

尚、Swift の *A Tale of a Tub, The Battle of the Books, The Mechanical Operation of the Spirit* の邦訳は深町弘三訳『桶物語、書物戦争、他一篇』(岩波文庫、昭和44年)によった。

<sup>2</sup> *Ibid.*, pp. 88-9.

<sup>3</sup> *Ibid.*, p. 95.

Digression Concerning Madness” に於いては、この「風神派」を狂気と結びつけている。彼にとって、「近代人が狂気なる言葉で意味するものは下等能力から発出するある種の蒸気の力により (by Force of certain Vapours) 頭脳が攪乱され変換をおこすことに外ならないとすれば、この狂気こそ、帝国と哲学と宗教の世界に起こったあらゆる大変動の生みの親であった」のである。Jack の体内には「蒸気」が排出されて、これが「熱狂」、即ち、狂気を生じせしめるのである。Swift に見られるこのような「熱狂」に対する考え方は彼独自のものではない。Phillip Harth は *Swift and Anglican Rationalism, The Religious Background of A Tale of a Tub* (The University of Chicago Press, 1961) の中で、この背景を、Robert Burton, Meric Casaubon, Henry More 等を引合に出しながら詳しく述べている。*The Oxford English Dictionary* は、今では使われなくなった意味として、‘enthusiasm’ を第一番目に ‘possession by a god, supernatural inspiration prophetic or poetic frenzy; an occasion or manifestation of these’ と定義している。ケンブリッジ・プラトニスト (Cambridge Platonist) の流れを汲んだ Anthony Earl of Shaftesbury はこの言葉の意味合いを「十分に明確に知ることが全くむずかしもの」と言っているように、いろいろと表現されている<sup>2</sup>。例えば、Henry More は、「熱狂」を「神に靈感を与えられている誤った自負心」(a misconception of being

<sup>1</sup> *Ibid.*, pp. 107–8.

<sup>2</sup> “The only thing, my lord, I would infer from all this is, that enthusiasm is wonderfully powerful and extensive; that it is a matter of nice judgment, and the hardest thing in the world to Know fully and distinctly; since even atheism is not exempt from it.” (Anthony Earl of Shaftesbury, “A Letter Concerning Enthusiasm,” *Characteristic Manners, Opinions, Times, etc.* [London: Grant Richards, 1900], p. 37.) Cf. “Edward Phillips in *The New World of Words* of 1658 says that ‘*Enthysias*ts (the form he prefers) are a certain sect of people which pretended to the Spirit and Revelations.’ This is repeated in 1662 and in 1671 (except that here *pretended* has been changed to *pretend*, so that one feels it is not all past history). By the 1720 edition, issued some quarter of a century after Phillips’s death, *Enthusiasm* has become Fanaticism, a making shew of Divine Inspiration. An Enthusiast is one that pretends to be so inspired, or transported with imaginary Revelations.” (Susie I. Tucker, *Enthusiasm, A Study in Semantic Changes* [Cambridge University Press, 1972], p. 15.)

inspired)<sup>1</sup>と述べ、この自負心の原因を‘imagination’の中に見ている<sup>2</sup>。そして、「人間を熱狂的にする気質は理性の最大の敵である」という理由で、「熱狂的な精神によって見出だされる真理」に疑いを抱いている<sup>3</sup>。Henry Moreを崇拝していた Joseph Glanvill は「我々の領域を煙と暗やみで満たすいろいろな意見を求めようとする熱情(zeal)』<sup>4</sup>を削ぐために出版した『科学的懐疑主義』(*Scepsis Scientifica*)の中で、この当時‘imagination’<sup>5</sup>がはびこり事実無根の軽信が信仰のためにほめそやされ、そして精神の運動のために、更に一層、印象が強烈になることを見て取っている<sup>6</sup>。このようなことから Glanvill の議

<sup>1</sup> Henry More, *Enthusiasmus Triumphatus: or A Brief Discourse of the Nature, Causes, Kindes, and Cure of Enthusiasm*, in *A Collection of Several Philosophical Writings 1662*, in two volumes, Vol. I (Garland Publishing, Inc., New York & London, 1979), p. 2.

<sup>2</sup> “[w] herefore it is the enormous strength of *Imagination* (which is yet the Soul’s weakness or unwieldiness, whereby she so farre sinks into Phantasmes that she cannot recover her self into the use of her more free Faculties of Reason and *Understanding*) that thus peremptorily engages a man to believe a lie.” (*Ibid.*, p. 4.)

<sup>3</sup> “[A] man should be so far off from thinking the better of any discovery of Truth by an *Enthusiastick* spirit, that he should rather for that very cause suspect it; because that Temper that makes men *Enthusiastical* is the greatest enemy to *Reason*, it being more thick and muddy, and therefore once heated intoxicates them like *Wine* in the muste, and is more likely to fill their Brains full of odde fancies, then with any true notions of Philosophy.” (*Ibid.*, pp. 35–6.)

<sup>4</sup> Joseph Glanvill, *Scepsis Scientifica 1665* (Garland Publishing, Inc., New York & London, 1978), p. 169.

<sup>5</sup> “[T]he *Imagination*, which is of *simple* perception, doth never of it self and directly mislead us: as is at large declared in our former discourse of *Sense*. Yet is it the almost fatal means of our deception, through the unwarrantable *compositions*, *divisions* and *applications*, which it occasions the *second Act* to make of the *simple Images*. Hence we may derive the *Visions*, *Voyces*, *Revelations* of the *Enthusiast*: the strong *Idea*’s of which, being conjur’d up into the *Imagination* by the heat of the *melancholied* brain, are judged exterior *Realities*.” (*Ibid.*, pp. 72–3)

<sup>6</sup> “There is yet another as deplorable a deceit of our *Imaginations*, as any: which is, its impressing a strong persuasion of the Truth of an *Opinion*, where there is no evidence to support it. And if it be such, as we never heard question’d or contradicted, ’tis then unsuspected. The most of mankind is led by *opinio-native* impulse, and *Imagination* is praedominant. An ungrounded *credulity* is cry’d up for *faith*; and the more vigorous impressions of *Phancy*, for the *Spirits* motions. There are the grand delusions of our Age, and the highest evidence of the *Imaginations* deceptions. This is the *spirit*, that works in the children of *Phancy*; and we need not seek to remoter resolutions. But the excellent Dr. *H. More* hath follow’d *Enthusiastic effects* to their proper *Origine*, and prevented our endeavours of attempting it. His Discourse

論は、あらゆる哲学的驕慢あるいは独善的自信に対する非難へと拡がる。この背景には、後で触れる彼の科学的懐疑主義がある。

ところで、Phillip Harth は先程の本の中で、Swift と More の関係に触れ、More は、*A Tale of a Tub* の中で重要な役割を果たしていることを論証している<sup>1</sup>。実際、次の More の一節は、Harth が指摘しているように、元もと、Robert Burton の「蒸気が他の器官から生じ、頭に昇って動物的な機能を変えてしまうという」考え方から由来しているものである<sup>2</sup>が、先程の Swift の *A Tale of a Tub* の中に見られる「風神派」の司祭が、風に向かってあんぐりと口を開け、風で身体を膨らませて、これをゲップにして弟子たちの口の中に吹き込む描写を思い起こさせるものである<sup>3</sup>。

熱狂者が、かくもすばらしい状態に高揚させている霊塊 (Spirit) は、食物などが腸にガスを生じさせるもの (Flatulency) にすぎず、これは、'Melancholy' の性質を持った圧縮空気が、詰まった器具 (Aeolipila) から出る風が火に應用されるように、時折、心気症 (憂鬱症) の体液 (Hypochondriacal humour) に、熱が加えられた結果、生じてきたものだ。そして、そのガスあるいは蒸気 (fume) は頭の上って、最初、心臓の温りで駆り立てられ元気づけられ、幾分、不純物が取り除かれて、精神を多様な想像力 (Imaginations) で満たし、そして構想 (Invention) を活気づけて拡大して熱狂者を、ものみごとに流暢に雄弁にしまうので、彼は自分の体の最も低いところにある貯蔵庫から新しいワインを取り出して、それで酔ってしまっているかのようである<sup>4</sup>。

---

of *Enthusiasm* compleatly makes good the Title; and 'tis as well a *Victory*, as a *Triumph*." (*Ibid.*, pp. 76—7.)

<sup>1</sup> *Swift and Anglican Rationalism*, p. 54.

<sup>2</sup> Phillip Harth, *Swift and Anglican Rationalism*, pp. 107—8. Cf "So howsoever these Revelations and Inspirations seem to fall us from heaven, they arise from the earth, from our selves, from our own *melancholy*, and *pride*, or our too much *homeliness* and familiarity in our accesses, and conversation with God, or *facility* believing, or an often *dreaming* the same thing." (Sermon No. 6, *The Sermons of John Donne*, edited with Introductions and Critical Apparatus, by Evelyn M. Simpson and George R. Potter, X [University of California Press, Berkeley and Los Angeles, 1962], p. 145.)

<sup>3</sup> *A Tale of a Tub and other Satires*, p. 96.

<sup>4</sup> Henry More, *Enthusiasmus Triumphatus*, p. 12.

このような「熱狂」の意味合いは、John Locke の *Essays concerning Human Understanding* の中で「熱狂は、理性にも神の啓示にも基づかず、のぼせた頭脳の、あるいは思い上がった頭脳の自負心から起こるが、一度、地歩を得ると、理性と啓示のどちらか、あるいは双方よりも強力に人間の説得や行動へ働きかけるものである」と述べられている。Dr. Johnson が、この言葉を *A Dictionary of the English Language* の中で、特に神との霊交を受けて事物の真相を解しているという自負心の意味に用いたのは、以上のような考え方を踏まえてのことであろう。

Basil Willey によると、「クエーカー教徒の『内なる光』は、プラトン主義者の『理性』、デカルトの『明析にして判明なる観念』、あるいは Lord Herbert of Cherbury が言う『通念概念』(common notions)などと並んで、17世紀がそれを尺度として古代の遺産を検証し、自己の精神的独立を宣言しつつあった更に今一つの確証<sup>1</sup>でもあったのであるが、17世紀中葉以降、この「心内の声」が高じて「熱狂」に取りつかれた人達が、宗教的熱情の為に全王国を覆そうと考えたり、自らを聖人の政府を作り上げるために神に思召されていると考えた時、「熱狂」は政治的となった。イギリスに於いては、この政治的熱狂者は‘Puritan’の名の下で宗教的なセクトの創始者となったのである<sup>3</sup>。つまり、彼らは宗教的な立場に於いて、‘Non-conformists’または‘Dissenters’と呼ばれつつ、国教会以外に立って信仰の自由を叫び、強いては政治的な立場に於いては市民革命(Civil War)に見られる政治上の自由を維持したのである。このような「熱狂」—特に宗教的な面に見られる多様さ—は17世紀以降に於いて避けられるべき精神状態であったということは、その当時のピューリタ

<sup>1</sup> John Locke, *An Essay concerning Human Understanding*, edited with an Introduction by Peter H. Nidditch (Oxford, 1975), p. 699.

<sup>2</sup> Basil Willey, *The Seventeenth Century Background* (London and Henley: Routledge & Kegan Paul, 1972), p. 72.

<sup>3</sup> Phillip Harth, *Swift and Anglican Rationalism*, p. 62.

ン諷刺を吟味するなら更に一層ははっきりされることと思う<sup>1</sup>。しかし、Swift の *A Tale of a Tub* は単なるピューリタニズムの「熱狂」「狂気」を排撃したのみならず、その対立概念であるカトリシズムの迷信 (superstition) に対しても矛先が向けられ、Swift はその両者にもとらわれぬ中道 (via media) 路線である英国国教会 (Church of England) の正統性を主張したのである<sup>2</sup>。David Hume は「熱狂」を「無知と一緒にになった希望、自負、厚かましき、のぼせた想像力」であると言い、「迷信」を同じように「無知と一緒にになった、弱さ、恐れ、憂鬱である」と言って<sup>3</sup>、この二つの関係を次のように説明している。

迷信は、市民の自由にとっては敵対者であるが、熱狂は同調者である。迷信が聖職者の下でうめき苦しんでいる時、熱狂はあらゆる教会の権力を破壊するのである。…言うまでもないことだが、熱狂は、大胆で、野心的な気質を持っているので、生まれながら、自由な精神を伴っているが、迷信は、人間を従順にし、卑屈にし、そして、彼らを隷属するに相応しくしてしまふ。英国の歴史によると、市民革命の間、組合教会派 (Independents) と理神論者 (Deists) は、宗教的原理に於いては、まったく対立しているが、政治上に於いて結びつけられ、そして、共和国に対して同じような情熱を持っていたのである。そして、ホイッグ党とトーリ党が生まれて以来、ホイッグ党の指導者は、原理上、理神論者であるか公然と認められた寛容主義者 (Latitudinarians) のいずれかでなければならぬ。つまり、彼らは、寛容に同調するが、キリス

<sup>1</sup> Cf. C. M. Webster, "Swift's *A Tale of a Tub* Compared with Earlier Satires of the Puritans." *PMLA*, XLVII (1932), 171—78. See also the same author's "Swift and Some Earlier Satirists of Puritan Enthusiasm," *PMLA*, XLVIII (1933), 1141—53, and "The Satiric Background of the Attack on the Puritans in Swift's *A Tale of a Tub*." *PMLA*, L (1935), 210—23.

<sup>2</sup> "Why should any Clergyman of our Church be angry to see the Follies of Fanaticism and Superstition exposed, tho' in the most ridiculous Manner? since that is perhaps the most probable way to cure them, or at least to hinder them from farther spreading. Besides, tho' it was not intended for their Perusal; it raillies nothing but what they preach against. It contains nothing to provoke them by the least Scurillity upon their Persons or their Functions. It Celebrates the Church of England as the most perfect of all others in Discipline and Doctrine, it advances no Opinion they reject, nor condemns any they receive." ("An Apology, *A Tale of a Tub*" *A Tale of a Tub and other Satires*, p. 2.)

<sup>3</sup> David Hume, "Of Superstition and Enthusiasm," *Of the Standard Taste and Other Essays* (Indianapolis, 1965), pp. 146—8.

ト教のいかなる特定のセクトにも無関心であるということである。一方に於いて、熱狂の強い色合いを帯びている非国教徒は、例外なく市民の自由を守るためにホイッグ党と意見があった<sup>1</sup>。

Hume のこの一節を踏まえて、「熱狂」「迷信」を考え直すなら、「熱狂」は極端なプロテスタントの側にあり、これは I 章で述べた J. M. Murry の言葉をもじって言うなら「個人の内」にあるもので、Eliot の「心内の声」に通じるものである。そして、Eliot が “The Function of Criticism” の中でこの「心内の声」に ‘whiggery’ という名を与えている<sup>2</sup>が、これは上に述べた Hume の一節 —「熱狂の色合いを帯びている非国教徒は、例外なく市民の自由を守る為にホイッグ党と意見があった」— をそのまま踏まえてのことであろう。一方、「迷信」はカトリシズムの側にあり「個人の外」にある権威を現わすもので、ホイッグ党に対して、トーリー党に属するものである。Swift が、*A Tale of a Tub* の中で、カトリシズムとピューリタニズムの両者が極端に走った悪弊を描いて、その中道である英国国教会の正統性を主張したのは、まさしく、このトーリー党とホイッグ党の両極端に走らない態度と軌を一にするものである<sup>3</sup>。以上のように、Eliot の言う「心内の声」批判は、17世紀中葉に見られる「熱狂」回避の意味合いを帯び、更には Swift の「風神派」批判と言った歴史的な流れに沿うものである。

### III

ところで、Eliot は「個人の内」にあるもの、「心内の声」「内的抑制」を中心にしたヒューマニズムを批判し、「個人の外」にあるもの、「外部の権威」を重要視してきたが、一方、「外部の権威」は「個人の価値や尊厳の減少、つ

<sup>1</sup> *Ibid.*, pp. 149—50.

<sup>2</sup> T. S. Eliot, *Selected Essays*, p. 29.

<sup>3</sup> 拙論「T. S. Eliot と Swift —『絶望』と『懐疑』を中心に—」『文経論叢』第19巻3号（弘前大学人文学部，1984），pp. 102—7

まり教会とか国家権威に自己を犠牲にする方向である」と警告を与えている<sup>1</sup>。つまり、Eliot は、極端に走らない「中道」(via media) を暗にほめかしている。この問題に関しては、既に拙論に於いて論じたことがある<sup>2</sup>ので、重複するかもしれないが、ここでは、当面との関連で、前に触れなかったことを補足しながら、簡単に触れるだけにしたい。Eliot の「中道」精神は、単に英国国教会の精神を示すばかりでなく、まさに字義通りの「中道」の意味で Eliot の批評の根底を支える一つの精神となっている。実際、Eliot の Murry に対する批判は、今まで見てきたように「心内の声」に向けられたものであるが、その根底に、Eliot は Murry の中に「文学に対しても、そのほか何に対しても」「その両方の態度を取ることが出来ない」極端に走る態度を見抜いたからなのであろう<sup>3</sup>。Eliot のこの「中道」精神に立って、Babbitt をみるなら、Murry に対する批判と同じようなことが言えるであろう。つまり、Eliot は Babbitt の「内的抑制」に基づくヒューマニズムに対して異義を唱えているが、その根底には Babbitt を「気質に於いて、余りにも極端に走る個人主義者なので、ある体系を作り上げたり、ある学派の創立者とはなり得ない」と見た Eliot の態度があったからなのであろう<sup>4</sup>。

ところで、Eliot のこの‘via media’は彼自身、生まれながらに身につけているものではなく、あくまでも「訓練と自制」(discipline and self-control)<sup>5</sup>によって達せられたものである。彼は1925年の“Rencontre”の中で、自分自身「ますます厳格で絶対的になりがちであるドグマチック (dogmatique) な考えに従って、すべてのものを測りがちである」<sup>6</sup>と言っている。Eliot のこの独断的な気質は彼の“Second Thoughts about Humanism”の中で、T. E.

<sup>1</sup> T. S. Eliot, “Francis Herbert Bradley,” *Selected Essays*, pp. 452—3.

<sup>2</sup> 拙論「T. S. Eliot の via media について」『日本文学研究』Vol. LXII, No.2 (日本英文学会, 昭和55年12月), pp. 175—189.

<sup>3</sup> T. S. Eliot, *Selected Essays*, p. 26.

<sup>4</sup> T. S. Eliot, “A Commentary,” *The Criterion*, XIII October, 1933), p. 118.

<sup>5</sup> T. S. Eliot, “John Bramhall,” *Selected Essays*, p. 359.

<sup>6</sup> *Nouvelle Revue Francaise*, XII (1 Apr., 1925), p. 658.

Hulme が「人間がどうしても達し得ない絶対的なもの (an absolute) が存在することを独力で見出した」と言って彼の功績を讃え、彼のドグマに対する考え方を受け入れたことにもうかがうことが出来る<sup>1</sup>。しかし、Eliot は、“Dante” 論の注で、信念 (belief) の問題を論じながら極端にまで推し進めるやり方を異端 (heresies) と呼び、「正統主義」(orthodox) は「対立の中でしか成立しない」と言っている<sup>2</sup>。このことは、彼自身ドグマに対して警戒心を抱いていたことを示しているのである。Eliot にとって、「一つの体系は、ほとんど必然的に少しばかりの歪曲と遺漏を伴うものである。」<sup>3</sup> 彼が *The Criterion* の編集で避けた態度は次のようなドグマの危険性なのである。つまり、「人がある主義、主張を通そうとするなら、熱狂的 (fanatic) になるか、偽善者になるかのいずれかである。そして人があるはっきりとしたドグマを持っているなら、その時、人はそのドグマを自分と一緒に協力する人に押し付けることになる」<sup>4</sup> 危険性なのである。このようにドグマを避け、‘via media’ を歩もうとする Eliot の背景には二元論 (dualism) に対する疑惑から生み出された F. H. Bradley の懐疑的精神 (scepticism) がある<sup>5</sup>。Eliot は懐疑的精神を「証拠を吟味する習性と、一気に事を決定しない能力」<sup>6</sup> であると述べているが、“Pascal” 論の中で彼はこの精神について、更に次のように言っている。

思考して行くあらゆる人間は自分自身の懐疑的精神を持たなければならない。つまり、その精神には、疑義で立ち止まり、否定に終わるもの、あるいは信仰に導き、そして、何とかして懐疑的精神を超えた信仰に纏められるものがある。そして、パスカルは、情熱的で、熱烈であるが、それは、力強い調整された知性 (a powerful and regulated

<sup>1</sup> T. S. Eliot, *Selected Essays*, pp. 490—1.

<sup>2</sup> *Ibid.*, p. 270.

<sup>3</sup> T. S. Eliot, “Niccolo Nachiavelli,” *For Lancelot Andrews* (London: Faber & Faber, Ltd., 1970), p. 46.

<sup>4</sup> Sir Herbert Read, “T. S. E.—A Memoir,” quoted in *T. S. Eliot: The Man and His Work*, edited by Allen Tate (A Delta Book, 1966), p. 21.

<sup>5</sup> 拙論「T. S. Eliot の via media について」 pp. 181—2.

<sup>6</sup> T. S. Eliot, *Notes towards the Definition of Culture* (London: Faber & Faber, Ltd., 1976), p. 29.

intellect) を通してのみ情熱的である, ある種の宗教的信仰家に見られるタイプとして, 彼の未完のキリスト教擁護論の第一部で, 信念の精神とは切り離すことが出来ない懐疑の悪魔 (the demon of doubt) に怯むことなく立ち向かっているのである<sup>1</sup>。

Eliot が Pascal の中に見た「懐疑的精神」は, 後で述べる信仰の問題と係わりあいながら, 「拒否と排除」(rejection and elimination)<sup>2</sup> によって進む「力強い調整された知性」を通してなされたものである。そして, Pascal の懐疑的精神, 疑惑は, そのまま Eliot の苦悩となって, “A Note on Poetry and Belief” 等に見られる<sup>3</sup>。実際, Eliot 自身「自分自身の信念は私が今まで全く逃れようと望んだことがない懐疑的精神でとらわれている」<sup>4</sup> と言っている。

このような「懐疑的精神」は今まで述べてきた ‘via media’ の精神, つまり一方の極端に走らないで, それぞれの極を疑い吟味し, 一気に事を決定しないで両極端の間を行く根拠を支えているものではなかろうか。懐疑主義の近代の祖と言われる Montaigne は *Les Essais* の中の “Apologie de Raimond Sebond” の中で, 「常に無知を告白すること, 如何なる場合にも, 讃否いずれかの側にも傾かない判断を持つこと, それを想像すれば, ピュロニズム (pyrrhonism) が如何なるものであるかを理解し得よう」と言って, ‘via media’ の背景にピュロニズムを見出だしている。そして, Montaigne はこの

<sup>1</sup> T. S. Eliot, *Selected Essays*, p. 441. cf. “Obviously, I mean by the sceptic, the man who suspects the origins of his own beliefs, as well as those of others; who is most suspicious of those which are most passionately held; who is still more relentless towards his own beliefs than towards those of others; who suspects other people’s motives because he has learned the deceitfulness of his own. (T. S. Eliot, “Note on the Way,” *Time and Tide* 16 [January 5, 1953], p. 6.)

<sup>2</sup> *Ibid.*, p. 408.

<sup>3</sup> “The majority of people live below of belief or doubt. It takes application and a kind of genius, to believe anything, and to believe *anything* (I do *not* mean merely to believe some religion) will probably become more and more difficult as times goes on ... For those of us who are higher than the mob, and lower than the man of inspiration, there is always doubt; and in doubt we are living parasitically (which is better than not living at all) on the minds of men or genius of the past who have believed something.” (“A Note on Poetry and Belief,” *The Enemy*, 1 [January, 1927], pp. 16—7.)

<sup>4</sup> H. S. Davies, “MISTAH KURTS: HE DEAD,” *T. S. Eliot: The Man and His Works*, edited by Allen Tate (A Delta Book, 1964), p. 360.

ピュロニズムを「どちらにも傾かず、あらゆる事物に服従も賛成もしない」態度で「不動心」(ataraxia) へ導くものであると言っている。このように考えると、Montaigne の ‘via media’ の背景には「判断中止」といった受動的なピュロニズムがあると見ていいだろう。しかし、Eliot は、このようなピュロニズムを「弱さの精神」であると言って、「強さの精神」である懐疑主義と区別している。このようなことは、先程触れた Pascal の中に見た Eliot の「懐疑的精神」に対する考え方を思い浮かべるなら、ある程度、理解されることと思う<sup>1</sup>。

以上のように Eliot の言う「心内の声」批判の精神的構造の根底には、どちら側にも片寄らない ‘via media’ そして、それを支えている「強さの精神」である「懐疑的精神」があった。このような Eliot の考え方は17世紀中葉以降に見られる「熱狂」回避の精神的風土ときわめて類似しているものである。以下の章では、今まで述べてきた Eliot との係わりの上で、その当時の ‘via media’ そして、「懐疑主義」を垣間見たい。

#### Ⅳ

Anthony Earl of Shaftesbury は、「熱狂」を癒す唯一のものは ‘good humour’ であり、これこそが敬虔と真の宗教の最上の基礎であると言っている<sup>2</sup>。ここで言う ‘humour’ とはギリシャの自然哲学、生理に於ける体液の意味であって、この立場から言うなら、熱狂者を、かくもすばらしい状態に高揚さ

<sup>1</sup> 拙論「T. S. Eliot と Swift」pp. 107—112.

<sup>2</sup> “Good Humour is not only the best Security against *enthusiasm*, but the best Foundation of *Piety* and *true Religion*; for if right Thoughts and worthy Apprehensions of the Supreme Being, are fundamental to all true Worship and Adoration, ’tis more than probable, that we shall never miscarry in this respect, <except> thro ill Humour only ... if we are afraid of bringing good Humour into Religion, or thinking with Freedom and Pleasantness on such a Subject as God, ’tis because we conceive the Subject so like ourselves, and can hardly have a Notion of *Majesty* and *Greatness* without *Stateliness* and *Moroseness* accompanying it.” (Anthony Ashley Cooper, Third Earl of Shaftesbury, “A Letter concerning Enthusiasm”, I, 1 *Aesthetics*, Standard Edition, Complete Works, selected Letters and posthumous Writings in English with parallel German Translation edited translated and commented by Gerd Hermmerich & Wolfram Benda [Frommann-Hozboog, 1981], p. 334.)

せている霊塊は、前に Henry More に触れたところで述べたように、元もと、‘melancholy’の性質を持った一陣の風で、憂鬱症の体液にたまたま熱が加えられた結果生じてきたものである<sup>1</sup>。つまり Shaftesbury の言う ‘good humour’ とは、バランスの取れた体液の配合で ‘via media’ そのものを意味しているものである。このように「熱狂」を避けて ‘via media’ を歩もうとする態度は、既に John Donne, そして、「中道」を質素でもなければ、きらびやかでもなく、……汝の賞讃で、栄光である<sup>2</sup>と英国国教会を歌い上げた G. Herbert 等の形而上詩人の中にも見られる。英国国教会の牧師である Donne は “Satyres” Ⅲ で真の宗教は何処にあるかということを次のように歌っている。

(大意)

偶像を賞賛したり、軽蔑したり、あるいは抗議したりすることは、すべて悪いことかもしれない。賢く疑え。知らない道で、正しきを尋ねて、佇むことは、道に迷うことではない。眠り、邪に走ることは悪いことである。ごつごつして、険しい、高い山の上に真理は立ち、そして、この真理に到達しようとする者は、ぐるぐる廻りながら進まなければならない。そして、この険しい山が、寄せつけないものを、このようにして手に入れなさい<sup>3</sup>。

<sup>1</sup> Phillip Harth, *Swift and Anglican Rationalism*, pp. 105—108. Cf. “I shall not satisfie my self in this more *generall* account of *Enthusiasm*, that it may very well be resolved into that property of *Melancholy* whereby men become to be *delirious* in some *one* point, their judgement standing untouched in *others*. For I shall further demonstrate that the very nature of *Melancholy* is such, that it may more fairly and plausibly tempt a man into such conceits of *Inspiration* and Supernaturall light from God.” (Henry More, *Enthusiasmus Triumphatus*, p. 10). See also my footnote 4 at pag 92.

<sup>2</sup> “A fine aspect in fit aray,  
Neither too mean, nor yet too gray,  
Shows who is best.

.....  
But dearest Mother, (what those misse)  
The mean thy praise and glorie is,  
And long may be.”

(“The British Church.” 11. 7—26. *The Works of George Herbert*, edited with commentary by F. H. Hutchinson [Oxford, 1967], pp. 109—110.)

<sup>3</sup> “To adore, or scorne an image, or protest,  
May all be bad; doubt wisely; in strange way  
To stand inquiring right, is not to stray;  
To sleepe, or runne wrong, is. On a huge hill,

つまり、この宗教的「真理」の在処は、極端に走ることによってではなく、疑いながら、両極端を吟味しながら、紆余曲折によって達せられる場所である。このような場所にある真の宗教は、“Holy Sonnets” XVIII の中で、「海を超えた向こうの土地に厚化粧をして立つもの」ではなく、「服を剥ぎ取られ引き裂かれてドイツやこの国で嘆き悲しむもの」でもないものとして、暗に宗教的中庸を行く英国国教会が歌われている<sup>1</sup>。Donneにとって、「啓示、幻影、霊の出現、そしてローマ教会の浄罪界の魂を容易に受け入れたり、また、一方に片寄り過ぎて、情熱を高揚させ過ぎ、ある者が陥ってしまう個人的な霊にとらわれて英国国教会 (the Reformed Church) の穏やかな中道 (moderate, and middle wayes) に満足することが出来ないことは、……間違った効果を生み出すもの<sup>2</sup>」である。このような Donne の中道精神は、その他、アングリカニズムを主張しロマニズムを攻撃した *Pseudo-Martyr, Ignatius His Conclave*, そして彼の説教集等を詳しく吟味するなら、いろいろと見出だされることと思う。そして、中道を歩もうとする Donne の背景には、Eliot と同じように、「賢く疑え」といった懐疑的精神がある。しかし、Donne の懐疑は、“An

---

Cragge, and steep, Truth stands, and hee that will  
Reach her, about must, and about must goe;  
And what the hills suddennes resists, winne so;”

(“Satyre” III, 11. 76—82. *The Poems of John Donne*, edited from the old editions and numerous manuscripts with introductions & commentary by Herbert J. C. Grierson M. A. Vol. I [Oxford University Press, 1953], p. 157.)

<sup>1</sup> “Show me deare Christ, thy spouse, so bright and clear.  
What! is it She, which on the other shore  
Goes richly painted? or which rob’d and tore  
Laments and mournes in Germany and here?”

(“Divine Poems,” XVIII, 11. 1—4. *Ibid.*, p. 330.)

<sup>2</sup> Sermon No.5, *The Sermons of John Donne*, VIII, p. 135. Cf. “Donne’s debt to Hooker is not a verbal one; but his treatment of law, for instance, in *Pseudo-Martyr* constantly recalls Hooker. To read the *Essays in Divinity* or the Sermons, after a re-reading of Hooker, is to feel at once that Donne has absorbed Hooker’s conception of the via media so deeply that it has become the basis of his own thinking. Donne is too often spoken of as accepting something which, in fact, he helped to establish.” (Helen Gardner, ed., *John Donne: The Divine Poems* [Oxford, 1969], p. XXI)

Anatomie of the World, The first Anniversary”の中で歌われている<sup>1</sup>ように、中世的な宇宙秩序に根ざす伝統的な信仰が、その当時台頭しつつあった「新しい学問」(new Philosophy)によって揺さぶられた結果生み出されたものである。Donneの中道精神と、科学に対する懐疑的態度は、更に考察を深めなければならないと思うが、少なくとも、彼は、前に触れた Joseph Glanvill が「王立科学協会」(The Royal Society)に呼び掛けた『科学的懐疑主義』の中で‘Scepticism, that’s the only way to science’<sup>2</sup>と言ったこと of the先駆けとなっているようである。この科学的懐疑主義は、既に Phillip Harth が Louis I. Bredvold の ‘Dryden-Pyrrhonist’ 説に反論した *Contexts of Dryden’s Thought* (The University of Chicago Press, Chicago and London, 1968)の中で述べられているので、これを頼りに、この辺のところを私見をまじえながら少しばかり見てみたい。

Harth は、Montaigneに見られる哲学上の懐疑主義 (pyrrhonism) は一般に政治に於いても宗教に於いても保守的であるということに留意し、もし

---

<sup>1</sup> “And new Philosophy calls all in doubts,  
The Element of fire is quite put out;  
The Sun is lost, and th’ earth, and no mans wit  
Can well direct him where to looke for it.  
And freely men confesse that this world’s spent,  
When in the Planets, and the Firmament  
They seek so many new; they see that this  
Is crumbled out againe to his Atomies.  
'Tis all in peeces, all cohaerence gone;”

(“The first Anniversary, An Anatomie of the World,” 11. 205—213, *The Poems of John Donne*, p. 237.)

<sup>2</sup> “[A] great part of our scientific Treasure is most likely to be *adulterate*, though all bears the image and superscription of *Truth*; the only way to know what is sophisticate, and what is not so, is to bring all to the *Examen* of the Touchstone: For the prepossessions of *sense* having (as is shewen) so mingled themselves with our Genuine Truths, and being as plausible to appearance as they; we cannot gain a true assurance of any, but by suspending our assent from all, till the deserts of each, discover’d by a strict enquiry, claim it. Upon this account I think the method of the most excellent Descartes not unworthy its Author; and (since *Dogmatical Ignorance* will call it so) a *Scepticism*, that’s the only way to *Science*.” (*Scepsis Scientifica* 1655, pp. 55—56.)

Dryden がこの哲学上のピュロニストであったなら、英国国教会を去って、イギリスではきはめて少数者のキリスト教に過ぎないローマ・カトリック教に改宗することはなかったであろうと考えている<sup>1</sup>。このようなことから、Dryden に見られる懐疑主義は、「何も確実に知られない」といった哲学上の ‘pyrrhonism’ ではなく、その当時の科学主義に基づいた ‘scepticism’ であると主張している。Harth はこのことを説明するために、王立科学協会の会員であった Glanvill や Robert Boyle 等の書き物を調べてその間の消息を明らかにしている。例えば、Glanvill は『独断の空しさ』(*Vanity of dogmatizing*) の中で懐疑主義を「詮索の自由」(Freedom of inquiry) にあると言い、Robert Boyle は、実験によって確かめられない自然に関する一切の命題は、すべて疑われて然るべきだということである。Boyle の名著の一つとなっている『懐疑的な科学者』(*The Sceptical Chemist*) という表題に見られる「懐疑的な」という意味にはこの意味が含まれているのである。このようなことから、「王立科学協会」の懐疑主義は「控えめ」(modesty) で「謙虚」(diffidence) で「詮索の自由」(Freedom of inquiry) であるとしている<sup>2</sup>。この懐疑主義の意味合いは、Dryden が *Dramatic Poesy: An Essay* 出版後、Sir Robert Howard の批判に答えて次のようにいったことに色濃く反映している。

彼 (Sir Robert Howard) は、彼の序文の至るところに見られるように、ここでも私を権威主義的 (magisterial) であると言って喜んでいる。それ故、私自身の為、許しを乞うて、私の全議論は懐疑的 (sceptical) であると言わなければならない。つまり、それは、ソクラテスやプラトン、そして古代のあらゆるアカデミー学派によって使われた推論の方法で……現在、王立科学協会の適度な探求 (the modest inquisition) によって模範にされているものである……御覧のように、*An Essay* は数人の異なった意見の持ち主によってなされる対話で、その意見のすべては、一般読者によって判断してもらう為に、彼らの意見をはっきりしないまま (doubtful) にしておかなければ

<sup>1</sup> Phillip Harth, *Contexts of Dryden's Thought*, pp. 3—4.

<sup>2</sup> *Ibid.*, p. 13.

ならない<sup>1</sup>。

O. E. D. によると、‘scepticism’の項の中に‘one who doubts the validity of what claims to be knowledge in some particular department of inquiring’<sup>2</sup>と記されているところが見られるが、上文の‘sceptical’‘doubtful’は議論の為の武器と考えられる意味に近いものである。Eliotの“A Dialogue of Dramatic Poetry”は、A. B. C. D. E.の五人の登場人物達の対話で議論が進められているが、この形式は正にDrydenの*Dramatic Poesy*を踏襲するものである。また、Drydenが“Art of Translation”の中でLucretusを批判して‘confident’, ‘magisterial authority’<sup>3</sup>と言い、自分は「本来‘diffidence’で‘scepticism’である<sup>4</sup>」と言っている。このようなことから考えるなら、Drydenの懐疑主義は議論に於ける‘inquiring’の意味合いを含みながら、Eliotが懐疑主義を定義して「証拠を吟味する習性と一気に事を決定しない能力」といったことと全く質を同じにするものである。つまり、DrydenとEliotの懐疑主義は、科学主義に根ざすかどうかといった違いはあるものの、両極端に走らない‘via media’の根底を支えているものではなかろうか。実際、Drydenの*Dramatic Poesy*の中に見られるMeanderの態度—Dryden自身であると認められている—は、相対立する諸説—例えば、Critesの三一一致法則が守られている古典劇の推奨、それに対するEugeniusの三一一致を大胆に破ったエリザベス朝の作品の賛美、またLisidiusのフランス劇の均整との対比から生まれるイギリス風の‘tragi-comedy’の混乱の排除など—の間を縫って、対立論を妥協し‘via media’の見解を見出だそうとしているものである。Drydenに見られる‘via media’は、アングリカニズムの立場から書かれた“Religio Laici”を分析して

<sup>1</sup> John Dryden, *Of Dramatic Poesy and Other Critical Essays*, Vol. I (Everyman's Library, 1971), p.123.

<sup>2</sup> *Ibid.*, Vol. II, pp.25—6.

行くならはっきりされることと思う<sup>1</sup>。この中には、人間の理性は、救いに必要なすべてのものを与えるという確信を持って、超自然的な啓示を排撃する‘deism’の立場と、人間の理性の権威を信ぜず、啓示への信仰にすべてを委ねる反理性的なカトリックの立場、つまり‘fideism’の立場が見られる。アングリカニズムの立場は、この理性と啓示の二つの立場の中間に立つもので、所謂‘via media’の精神を根底とするのもである。実際、Drydenはこの“Religio Laici”の序文の中で「この小論文で援助として使ったものは、その多くが英国国教会の神父達の作品から取られた<sup>2</sup>と述べ、アングリカニズムの立場を表明している。このような懐疑主義を基盤とする理性と啓示の中間に行く‘via media’はEliotが“Pascal”論の中で「自由意志と超自然的な恩寵……とが協力してこそはじめて人間の救済が行なわれるのだ<sup>3</sup>とやったことに最もよく表わされている。Harthはこのような立場からBredvoldの‘Dryden-Pyrrhonist’

<sup>1</sup> Dryden は理性 (reason) を批判して  
Dim as the borrow'd beams of moon and stars  
To lovely, weary, wand'ing travelers,  
Is Reason to the Soul. (ll. 1—3)

と言っている。このような Deism 批判、もしくは Fideism は“Religio Laici”の詩を分析して行くなれば、いろいろな所に散見されると思うが、Bredvold はこれを盾にとり、*“Religio Laici”* は Dryden がカトリック教に改宗してから書いた *‘The Hind and Panther’* の序曲と言っている。Bredvold のこの見解は、長い間一つの定説となっていたが、1961年 Thomas H. Fugimura が *“Dryden's Religio Laici: An Anglican Poems”* と題する論文で彼の考えにことごとく反論したことは承知のことである。実際 *“Religio Laici”* の中に見られるカトリック教批判の一例を示すなら、カトリック教の武器の「伝統」が無誤謬 (infallible) でないことを Simon 神父の *Critical History of the Old Testament* に触れながら Dryden は次のように言っている。

Where we may see what errors have been made  
Both in the copier's and translator's trade;  
How Jewish, Popish interests have prevail'd  
And where in fallibility has failed. (ll. 248—251)

かくして、Dryden は「伝統」と「理性」の中道を取ることになる。

More safe, and much more modest 't is, to say  
God would not leave mankind without a way;  
And that the Scriptures, tho' not everywhere  
Are uncorrupt, sufficient, clear, intire,  
In All things which our needful faith require. (ll. 295—300)

<sup>2</sup> *The Poetical Works of Dryden*, edited by George R. Noyes (Houghton Mifflin Company, Boston, 1950), p.157.

<sup>3</sup> T. S. Eliot, *Selected Essays*, p.413.

説に反対して Dryden の 懐疑主義を見ているが、Dryden の “Religio Laici” の題名をもじったと思われる “Religio Medici” の作者 Thomas Browne は「意見の相違で、どのような人とも分かつことはないし……私と意見が違ったということで、その人の判断に腹を立てることはない」と述べ懐疑主義について次のように言っている。「私は、あらゆる種類の哲学思想を経てきたが……結局、最も賢い人は、ほとんどすべて懐疑主義者 (scepticks) になり、知識の分野では、両面の神ヤヌス (Janus) のように立つものであるということを知る」と。更に、Browne は「知識の高みにおいて、自分の無知を嘆いているソロモンは、私の自惚れを謙虚にしたばかりでなく、私の努力の出端を挫いた」とも言っている<sup>1</sup>。「Browne の変わり種」と呼ばれた Glanvill が「理性と信仰の一致」を論証し、「名々の真理は、二つの虚為の間にある為に、誤謬に近いものである。一方から遠ざかる人は、他方に滑り落ちがちである……この危険を避ける最もいい方法は、中道 (middle course) を進むことである<sup>2</sup>」と言ったのは、以上のような Browne 特有の心の平衡の一端を受け継いでいるからなのであろう。このようなヤヌス的な考えは、その当時の George Savile こと Marquess of Halifax の *The Character of Trimmer* の結論—「トリマーは ‘Divine virtue’ によって引き起こされたもので両極端の中間に位置する」—等に見られる<sup>3</sup>。そして、このトリマーは左側にミトラをかぶった司教と右側に桶を説教壇にした非国教徒が半々に戯曲化されて描かれている<sup>4</sup>。この辺のことは、稿を改めて、Richard Hooker の *Of the Laws of Ecclesiastical Politie* 等の立場から更にいろいろと検討を加えなければならない数多くのことがあるが、Basil Willey は Browne のこのヤヌスを Eliot

<sup>1</sup> See my footnote 1 at page 99.

<sup>2</sup> “Catholic Charity,” Joseph Glanvill, *Some Discourses, Sermon and Remains, 1681* (Garland Publishing, Inc., New York & London, 1979), p. 119.

<sup>3</sup> Halifax, “The Character of a trimmer,” quoted from *Jonathan Swift: the Contemporary Background* by Clive T. Probyn (Manchester, U. P., 1978), pp. 101—2.

<sup>4</sup> Christopher Hill, *The Century of Revolution 1603—1714* (Edinburgh: Thomas Nelson, 1961). p. 292.

の‘unified sensibility’と結びつけながら、「Browneは……スコラの訓練と、ルネッサンス期の融通無礙の探求心との混血児であった」と言っている。つまり、Browne のいうヤースス、あるいは ‘great amphibian’ とは、Eliot の ‘sensibility’ の立場から言うならば「思想」と「感情」の両極端に走らない ‘via media’ を根底にしているものである。

以上、Eliot の ‘inner voice’ 批判の根底にあると思われる考え方を17世紀以降に見られる ‘enthusiasm’ 回避との関係から考察してきたが、この問題は、Eliot が英国教会の中でも「高教会」(High Church) に属していたということ、また彼の詩人論、例えば、Milton 批判、あるいは Shelley の詩と理念との自己同一化へと発展して行く「直感」に対する批判等の根底に流れているものである。従って、Eliot と17世紀の問題は、従来論じられてきた単なる形而上詩人たちの「思想」と「感情」の統合といった問題、またその当時に見られる神秘主義的要素の反映といった表面的なことではなく、17世紀の「熱狂」批判に対する態度がそのままアングリカンの立場としての Eliot に受け継がれ、Eliot はこのような問題を J. M. Murry の「心内の声」を手掛かりとして新しく提起したように思える。

---

<sup>1</sup> Basil Willey, *The Seventeenth Century Background.*, p. 45.